

マリアのイエス懐胎の傍らを、洗礼者ヨハネの母エリサベトの懐胎が伴走している。とはいっても、エリサベトは皺を縦横に刻んだ老女で(ルカ 1:36)、マリアは世事に疎い十代の少女。

随分極端だなあ、と思う。「神にできないことは何一つない(1:37)」ことの徴だろうが、マリアにすれば絶望的な試練(1:31)。天使から一方的に「おめでとう(1:28)」と言われたって、ただ困惑するばかりだ(1:34)。

天使はマリアに「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる(1:35)」と告げた。であるならば、「神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治める(1:32~33)」とはどういうことか。ヨセフ(1:27)がイエスの父だということを、暗に語っているようなものじゃないか。

天使の告知には、矛盾を抱えた膨らみがある。イエスの死後、福音書よりも早い時期に書かれたパウロの手紙は次のように述べている。

「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められた。この方が、わたしたちの主イエス・キリスト(コリ 1:3~4)」。なるほど、そうか。イエスは「聖なる霊」によれば神の子であり、「肉」によればどうやらヨセフが父らしい。

またイエスは「ダビデの王座でヤコブの家を治める」程度の限られた範囲ではなく、「すべての異邦人を信仰による従順へと導く(1:5)」ほどの神の子(1:4)である。ゆえに福音書は「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む(ルカ 1:35)」と述べて、民族の想像力や希望を遥かに凌ぐ救いを告げる。

イエスの肉の父は、ヨセフでも、見知らぬ男でも、生殖能力のある聖霊でもいいじゃないか。根本的に「生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる(1:35)」のだから。

聖書の歴史研究に慄かされたり、逆に超常現象でも史実だと強弁したりせず、天使がマリアに告げた救いそれ自体(1:35)に注目しよう。

戸惑い混乱しているマリア(1:29)に天使は言う。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた(1:30)」。

マリアは、天使の告知で己が使命を了解したわけではない。だが「恐れるな」という言葉で閉じていた自己が開かれ、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように(1:37)」と応じた。

クリスマスの奇跡に限らずとも、私たちは折々「恐れるな」という言葉を聞いている。そして戸惑ったまま神に己を開く時、「聖霊が降り、神の力が私を包む(1:35)」。

初期イスラエルの宗教的指導者サムエルが生まれた時、母ハンナは祈った。

「勇士の弓は折られるが、よろめく者は力を帯びる。食べ飽きている者はパンのために雇われ、飢えている者は再び飢えることがない(サムエル上 2:4~5a)」。

偉大な母たちは世の逆転を祈るらしい。マリアの讃歌も同じだ(ルカ 1:51~53)。マリアは、おとなしい純朴少女ではない。神による変革を求める義に燃えた女闘士かもしれない。とはいえ、イエスの弟や妹を次々に産むおっかさんマリアは、生活に追われてそれどころではなくなる。

ハンナは祈った。「主は命を絶ち、また命を与え、陰府に下し、また引き上げてくださる(サムエル上 2:6)」。あたかもイエスのことではないか。そして、キリストの復活に与る私たちへの救いではないか。



《おまけのひとこと》

女たちは己が内的感覚を大事にする 男たちは言葉で捉えられない聖霊の微妙な働きを見逃しがちだが母と幼子は無口で大胆な父に助けられた 神の巧みなキャスティング 私たちにおいても然り